RESEARCH FRONT 2

歴史から現代社会を考える視点を獲得し、現代の諸問題を考察する

教育学部教授
東 晋次
ひがししんじ
歴史学博士
専門分野は、中国古代史
1944年生まれ

「任侠」というと、暴力的な世界を思い浮かべますが、
そこには、人と人との生死をかけた友愛関係が存在します。
三重大学教育学部では、現代社会への示唆に富んだ歴史学の視点から
人間の普遍的な心性もうかがえる任侠的な人間関係に注目し、
現代のさまざまな問題を研究しています。

『三国志演義』に見る生死をかけた契り

『三国志演義』といえば、日本人にも人気のある中国の歴史小説です。その冒頭、「桃園に宴し豪傑三たり義を結ぶ」で、劉備と張飛・関羽との義兄弟の契りが結ばれ、その生死を共にする信義の関係は終生変わりませんでした。諸葛亮と劉備の関係もそれに近いといってよいかもしれません。中国史上に見られる、このような人と人との生死をかけた結合関係は、現代の我々にはもはや無縁なものなのでしょうか。人はなぜ『三国志演義』に魅かれるのでしょうか。

各地で生まれた任侠的結合関係

中国古代の春秋時代末、前5世紀前半頃に「任侠的結合関係」と呼ばれる人的結合関係が発生しました。「任侠」の定義は難しいのですが、ひとまず「恩(徳)や信・義を媒介にして、気力(勇気)をもって利他行為を敢行すること」としておきます。それは、ただ単に同情し親切心を発揮するということではなく、あくまでも己を認めてくれた他者に対する返礼として、敢えて危難に向かい身命をも賭す心情的倫理と行動のことであります。これに類似する世界史上の人間関係として、ローマの時代に、フィデス(信義)にもとづく忠誠関係としてのクリエンテーラがあり、イスラム社会でのフトッワ(寛大さ)の徳を尊ぶフィトヤーンやアイヤールという任侠の徒の存在も知られ、その集団は都市の防衛や治安維持にも重要な役割を果たしました。

『史記』游侠列伝
(上杉本 国立歴史民俗博物館所蔵 国宝)

漢代の画像石に描かれた、
刺客の荊軻が秦王(始皇帝)を襲う図。
荊軻の死後、彼の友人で、筑(古代の楽器)の
名手である高漸離が、始皇帝に対し
復讐を図るが失敗して殺される。

自由主義者による政治運動(名古屋事件)に
多数の博徒も参加していた事実を克明に調べ上げ、
自由民権運動の見直しを迫った長谷川昇
『博徒と自由民権』(平凡社)

これまでの後漢時代史研究の成果。
『後漢時代の政治と社会』(名古屋大学出版)
『王莽ー儒家の理想に憑かれた男ー』(白帝社)

時代を超えて普遍的に存在する心性

我々の生きる現代とは異なり、前近代社会では「法の支配」が貫徹していません。人々の共同意志が結集された法がすべてを律するのではなく、支配権力を掌握したものが、秩序維持を名目に人々の意志を左右しようとして上からかぶせてくるのが法網であり、それ自体が一つの暴力です。そのような社会で、自分を護るために必要な処置をとらなければならないとしたら、暴力的手段に訴える他はない、つまり「自己救済の論理」で生き抜いていかざるを得ないでしょう。任侠者が往々にして権力に抵抗する集団を結成したり、法禁を犯すのはそうした理由によります。江戸時代の仇討ちに見られる復讐もその一つです。現代において、肉親を殺された人びとの心に胚胎する、加害者への復讐の欲求はその名残と見ることもできます。これは時代を超えて普遍的に存在する心性ではないでしょうか。現代世界の各地に広がる紛争も、そのような心性によって支えられている部分がないとは言えないと思います。この暴力的手段に訴える際に、前近代社会では任侠者がその助力者として活躍する場合が多かったのです。「弱きを助け強きをくじく」任侠道に生きる侠客と呼ばれる人びとが、数多く日本の歴史にも名を残しております。

「任侠」を現代社会を考える思考拠点に

歴史学は、単に過去の姿を明らかにすることにのみ、その目的があるわけではありません。現代社会の在り方やその行く末を考える視点を獲得する学問でもあります。中国古代の時代区分論や後漢時代史に関する純然たる歴史学上の諸問題の解法に研究の重点を置いてきた私が、ある時から、任侠的結合関係に注目するようになりました。生死をかけて結びつく友愛の関係は、時に第三者を殺傷する暴力行為を生み出してしまいますが、友愛性と暴力性が最もハッキリと表れる任侠的結合関係における人間心性の基本構造や、そうした関係の歴史的変化と地域的在り方の相違の追究を通じて、現代社会を反省する一つの思考拠点にしたいと思ったからです。例えば、大人及び子供の世界双方に見られる「イジメ」を生み出す機制の解明は緊要な課題です。NHK番組「プロジェクトX」に現れるような、意気に感じ、理想の実現や課題の解決に向かって協力し合う人間関係は、どのようにすれば形成可能でしょうか。これは、規則や慣習に縛られ、組織運営の惰性に流され、あるいは一身の利害に汲々とするあまり、創造や改革を志向する協同的な人間関係が結ばれにくく、組織の不活性化を招きやすい現状を克服するために是非とも考えられなければなりません。また、人間や社会あるいは国家間の友愛と暴力の関係において、後者を如何に制御するか、も重要です。中国古代の任侠的結合関係は、そのような考察にどのような示唆を私たちに提供してくれるのでしょうか。人類史上の人間の経験に学びながら、これらの諸問題を考えていくことが今後の私の課題です。